

甲虫ニュース

December 1998

No. 124

COLEOPTERISTS' NEWS

草間慶一先生の逝去を悼む

佐藤正孝

本学会の前身である日本鞘翅目学会の創立に関わられ初代会長であった草間慶一先生が逝去されたとの報に接し、ひとつの時代が過ぎたのだと深い悲しみに浸ると共に残念な思いで一杯である。それは、昆虫少年時代から京浜昆虫同好会を通してお名前を存知あげ、そして日本鞘翅目学会、さらに日本鞘翅学会と発展してゆく流れの中で、何かと接する機会を多くしてきたこと、世代の交代を実感する年になったことなどの思いが去来し、交叉するからである。しかもこの第二次世界大戦後から現在に至る日本の甲虫類研究の流れは、プロとアマチュアとの接点の中で築かれてきた本学会の精神的反映があって運営されてきたものである。それは、草間先生ご自身が生化学という本業での教授職にありながら、一方でカミキリムシの分類学的研究という立場でプロとアマチュアの橋渡的存在として大きく貢献されたことにある。同好会から学会への変革の中で、先生は大きな役割を果たされ、多くの同好の志を育成されてきた。今、その人達によって次の時代が築かれようとしている。

草間先生に最初にお目には掛ったのは、確か奄美大島の新村と記憶しているが、小さな村で2軒ある旅

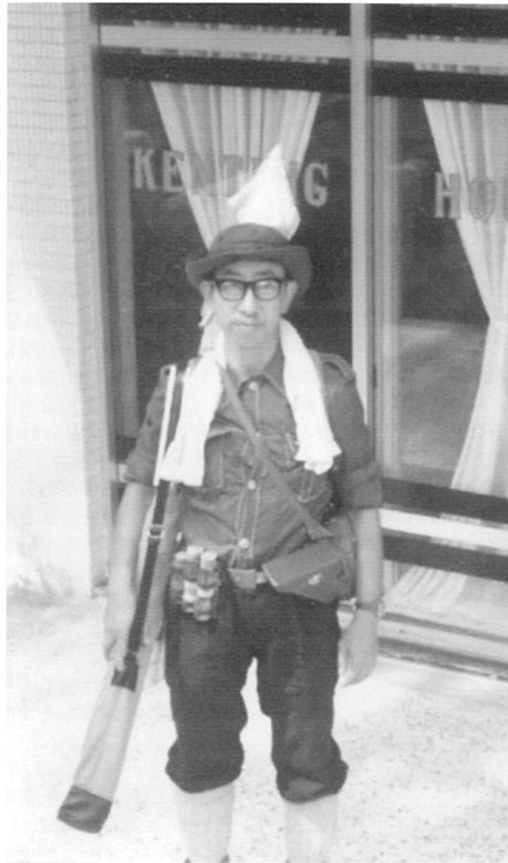
館に別々に滞在していたと思う。夕方、ハブが出没するかも知れない道で下駄をはいてブラブラと歩いて

いた折に虫好き同志の直感として話を交した。しかし、初対面と思えなく色々な話を伺ったように記憶しているが、それは当時故大林一夫氏に師事していた私は、草間先生のことを新進カミキリ屋さん(失礼!)としてすでにお話を伺っていたことによるものであった。その後、九州大学で文献コピーをしておられた折、さらに年を経、色々な立場でお会いするにつれ、その温厚な人柄に触れることができた。

一方どんな巡り合せか、お弟子さん達の陰謀か、鞘翅目学会の最後の会長を引き受けることになってしまった。その折の引き継ぎが、すべておまかせとのことで少々戸惑ったが、後任者が自由に活動でき負担をかけまいとする人柄が今に偲ばれる。幸にして1年で日本鞘翅学会として再出発に漕ぎ付けることができたのも、先生とその教えを受けた虫屋さん達のお陰であったと感謝の念にたえない。どうか天界から我々の今後の活躍をお見守り下さ

るようお願いと共に、草間先生のご冥福を心からお祈り申しあげる次第である。

(日本鞘翅学会会長)



ありし日の草間慶一先生
台湾墾丁公園にて

あらゆる師であった氏の死を偲んで

——草間さんの思い出——

露木繁雄

1998年10月6日(火)、草間慶一さんは黄泉の世界へ旅立たれた。

私の草間さんへの思いは、1998年10月10日(土)に静岡市の平安ホールで行われた葬儀の際に、私が読んだ弔辞にすべて要約されているので、追悼文としては異例な形とは思いますが、最初にその弔辞を載せさせていただきたい。

弔 辞

僕の一番恐れていた日が、こんなに早く、また突然に来ようとは、思いも寄りませんでした。

草間さん、どうして僕に一言の断りもなく彼岸へ行ってしまったのですか。

草間さんは僕が中学生のころからのカミキリムシの先生ですが、ムシの先生だけではなく、山登りの先生であり、マージャンなどの遊びの先生であり、お酒の先生でもあり、もちろんいろいろな勉強の先生であり、また人生の先生でもありました。ですが、僕は一度も草間先生と呼んだことはありません。何故なら草間さんは草間さんであり、慶一さんであり、お兄さんであったからです。

ムシと草間さんと僕との思い出は数限りなくありますが、僕が高校1年のときに初めてのカミキリムシ採集として南アルプス・赤石山系へ連れていってくれたときのことは、今でも昨日のことのように鮮明に覚えています。そもそも山登りなど全く経験のない、その辺の丘みたいなのところしか行ったことのない高校1年生を、いきなり3000m級の山へしかも、2週間も入っているという無茶な計画でした。それでも、当時としては画期的なカミキリムシの成



日高山脈トツバツ岳東側の「Aカール」と呼ばれていたカールにて。右より西川、草間、露木、1958年7月19日。

果をあげられ、しっかり赤石岳と荒川中岳の頂上に立つことができました。これも草間さんの臨機応変で、しかも冷静沈着な判断があったからだと思います。

もう一つは、僕が大学3年のときに大学の先輩2人と草間さんの4人で北海道に採集旅行したときのことです。日高山脈の最高峰・ポロシリ岳へ採集もかねて登ったのですが、当時ここはほとんど登山の人は来ず、たまに大学の山岳部の連中が来るくらいで、ほんとに秘境というにふさわしい場所でした。ここで思わぬ嵐に遭い、テントは潰れ、すべての荷物は水浸しになり、ただでさえ重いリュックは倍ぐらいの重さになり、命からがら脱出してきたのですが、あとで草間さんは「あの時は本当にダメかと思った」と述懐していましたけれども、ちゃんとわれわれ3人の性格を把握していて、それぞれの能力フルに発揮させて危機を脱出させてくれました。

強力なリーダーシップを発揮してグイグイ引っ張っていくタイプではないのですが、いつの間にかうまくその人の気持ちをつかんで、力を出させるといった本当の意味での指導者だったと思います。

最後に僕と草間さんとを結び私自身の不思議な体験をお話したいと思います。もう30年近く前になりますが、東京・五反田の喫茶店で毎週木曜日にムシ好きの集まりである「木曜サロン」が開かれていたころ、草間さんはもう静岡に行かれていましたから年に1~2度出られるかどうかの状態でした。出てこられるときも、とくに前もって連絡などはなく、東京に用事があるときにヒョッコリ顔を出されるのです。僕は欠かさず「木曜サロン」に出席していましたが、ある木曜日いつものように五反田駅で電車を降り、駅から50mぐらい離れたビルの2階にある喫茶店に向かいました。駅前の歩道橋を渡っていると、突然頭のなかに「あっ、サロンに草間さんが来ている」という思いが浮かんだのです。もちろんそこからは喫茶店は見えませんが、今日草間さんが来るということは何の連絡もありませんでしたから、どうしてかな? と思いながらサロンへ行ってみると、そこに草間さんがいるではありませんか。我ながらほんとに驚いてしまいました。

草間さんへの思いは一日中話してもつきませんが、お別れのときが来たようです。

草間さんの昆虫標本は僕が間違いなく引き継いで、しっかり管理しますから安心してお休みください。僕がそちらへ行ったら、またいろいろ教えてください。それでは取り敢えずさようなら。

1998年10月10日 露木繁雄



日高山脈トツベツ岳山頂にて。草間、西川協一、河原 誠、露木の4人で北海道（主に日高と知床）を2週間ほど採集旅行したときのもの。右より草間、西川、河原。1958年7月19日。



御岳（長野県）第5回好虫会。右より草間、穂積、露木。1990年7月22日。

私と草間さんとは、私が中学1年生（1950年）のときからのお付き合いなので、かれこれ半世紀近い時間が過ぎ去ったこととなる。もし草間さんにお会いしなかったら、私の人生は全く違ったものになっていただろう。人との出会いが生涯にいかにか大きな影響を与えるか、改めて考えさせられてしまう。

草間さんは男ばかりの4人兄弟の長男で、必然的にリーダーシップを身につけられたのではないと思う。私が生まれ育った神奈川県逗子市に長年在住され、戦後の混乱期に子供会を始められ、すさんだ時期の子供たちに夢と希望を与えてくれた。本人はおそらく意識していなかったと思うが、結果的に多くの子供たちを非行から救ったに違いない。

その頃から「お兄さん、お兄さん」と親しまれ、草間さんの家はいつも子供たちの溜まり場になっていた。当然多くの子供たちが草間さんの昆虫標本を見ていたし、一緒に虫を採りにいったりしているはずだが、幸か不幸かムシ屋になったのは私だけであった。

私は中学3年ころから虫の魅力に取りつかれ、その後はまさに坂道を転がり落ちるように、虫の世界にはまりこんでいった。高校生のころは毎日のごとく草間さんの家に入りびたっていたが、ウィークデーはほとんど夜の9時を過ぎないと帰らない草間さんを待って、夜遅くまでおじゃました。特に草間さんが結婚されてからも、非常識にも同じようなことをして、奥様には大変ご迷惑をお掛けしてしまっただけで、それでもこんな私をご本人はもちろん、ご家族の方も暖かくもてなしてくれました。

草間さんのお父さまは、大学現役のころは帝大（当時はまだ東京帝国大学）の三羽鳥といわれた秀才で、私がおじゃましていたころは、横浜国立大学の教授をなさっており、本当にもの静かな方であったことを覚えている。

草間さんが虫に親しんだのは小学校3年のころと聞いている。当時のムシ屋の常道である蝶屋から

スタートし、5年生のころ一緒に虫を集めていた田中 明さん（元・北海道大学教授）から、甲虫のほうが面白いからと誘われ、それからカミキリムシに夢中になったと伺っている。1930年代～40年代はまだ日本のカミキリムシの黎明期で、今日のように優れた図鑑などはなく、同定するのは大変だったようだ。特にどんな文献があるのか、どこにあるのか、また、どうすれば見ることができなのか、入手できるのかといった基本的なことに苦心されたらしく、よく「あとの連中にはこんな苦労はさせたくない」とおっしゃっておられた。文献についてはほとんど独力で集められたが、「長谷川仁先生にだけはお世話になった」とも話しておられた。

草間さんは新しい採集地の開拓と地域ファウナの解明に特に情熱を燃やし、奥日光を始め、伊豆・天城山、南アルプス南部、北海道・知床など、新地域のカミキリ相の調査に尽力された。このような一連のご努力は、多くのアマチュアカミキリ屋への大きな刺激となり、日本全体のカミキリ相解明に多大な貢献をした。

私は時間をムダにする名人だが、草間さんはその反対で、1980年代半ばごろ、不幸にして脳内出血に襲われるまでは「テレビは全然見ないんだよ、だけど年に一回紅白歌合戦だけ見るんだ」とよく話しておられ、家にいるときは寸暇を惜しんでカミキリの研究をされていた。

草間さんについて、昆虫関係の方にはあまり知られていない面を主に書いてみたが、いずれにせよ、本学会を創始されて会発展に諸々の力を尽くされた氏が逝かれたことは、本会にとっても日本のカミキリ界にとっても大きな損失であり、悔やんでも余りある思いである。もう少し長生きして私の精神的な支えていてほしかったが、これも今は叶わぬこととなってしまった。まことに残念だが今はただご冥福をお祈りするのみである。

（逗子市逗子7-1-24）

●草間慶一先生とアマチュアイズム

林 匡夫博士の訃報を草間先生にお伝えせねば、とお電話して、不覚にもはじめて先生の重いご病気を知った。先生のご意志で昆虫関係者には伝えなかったという。奥様からは翌日に露木繁雄氏とお見舞いに行くお許しを得たが、それも叶わなかった。なんとその日の晩、先生は逝かれてしまったのである。親しい弟子たちといえど、病気の姿を見せたくない、という先生の頑なな思いだったのだろうか。

カミキリ界に果たした草間先生の功績はあまりに大きい。それは2つに大別されるだろう。1つにはもちろん、学術的な貢献である。もう1つは、たくさんのおアマチュアを育成した点である。先生のこの2つの功績があってこそ、カミキリ界が活性化し、日本のカミキリ相解明の気運が一気に盛り上ったのである。

草間先生のカミキリ界への最初の業績は、「白骨の天牛」(1940)だという。とすれば、先生が15,6歳の頃である。また、本格的に地域のカミキリを扱った目録としては、私の知る限りだと「逗子・鎌倉附近の天牛目録」(1950, 個人出版)が最初である。先生が25,6歳の時であるが、失礼ながら熟年の頃とは別人と思われるほど整然とした字の手書き孔版で、105種が生態的な知見などを含め掲載されている。続いては、Insects Magazine 誌上での「三浦半島中北部のカミキリについて」(1954-1955)であろう。各種の三浦半島内での分布や寄主植物、発生消長まで扱っており、地域昆虫相の解明をめざそうとする人たちにぜひ一読をおすすめしたいほど、地域カミキリ誌として優れた論文である。そして、これら2つの目録で見過ごせないのが、「最も普通」「普通」「やや普通」「かなり稀」「稀」「極稀」「不確実種」といった区分ですべての種を評価した点であり、やがてこの評価法などは京浜昆虫同好会編の「新しい昆虫採集」の新旧シリーズに掲載された日本産カミキリ一覧表(1959; 1965; 1973)につながっていく。また、南アルプス、天城山、静岡県、台湾とカミキリ相を精力的にまとめられていったし、Insects Magazine 誌上にリレー式の採集紀行文を書かれた。そこに、よい意味での採集欲、仲間との親交、地域昆虫相解明というアマチュアイズムを強く感じとることができる。さらに、各種雑誌類でネキダリスやピドニアの総説を執筆されたりした。これら一連の著作、とくにカミキリ一覧表が全国のアマチュアを育て、活動の原動力となってきたことは論をまたない。

私自身もカミキリ一覧表で育った1人である。未だ見ぬ種への憧れ、採集の楽しさ、分布調査の必要性など、実に多くを教わった。さらに人生の好運として、草間先生自身と本当に親しくお付き合いさせていただいたが、今となってはその恩義は計り知れない。幸いにも「新しい昆虫採集案内」3巻を編集し、そこでの一覧表作りをお手伝いできたこと、「日本産カミキリ大図鑑」を先生のご研究の集大成とし

て構想し、その大部分の執筆に加われたこと、「Kusamaia (草間慶一先生記念論文集)」を企画・刊行できたことなどで、いくらかは草間先生のお役に立てたのかもしれない。しかし、享受した恩に報いるべき限界などはない。私自身は、これからも草間先生の信条たるアマチュアイズムを継承していくことを誓いたい。

私ばかりではない。草間先生から直接あるいは間接的に恩恵を受けた方はたくさんおられることと思う。それぞれの立場で、アマチュアイズムを育て継承していくとともに、日本とその周辺地域のカミキリ相をより詳しく解明し、まとめていくことが先生への何よりの供養になると信ずる。ぜひ実行をお願いしたい。(高桑正敏)

●最高の業績はカミキリの6段階評価?

世紀末に近い1998年10月に、林 匡夫博士と草間慶一博士がほぼ同時に逝去され、日本のカミキリ界は東西の両巨頭を一度に失なった。戦後の50年をふりかえると、林先生がいなければ、日本のカミキリ相解明の土台が中々できなかったこと、草間先生がいなければ、日本のカミキリ愛好者はこれほどまでに増えなかったであろうことに思い当たる。

虫好きにかぎらず、趣味の仲間というものは、世間一般の交わりと比べて、年齢差によるギャップがあまりない。親子、おじいさんと孫ほどの年の違いがあっても、趣味の世界では同じように付き合えるのが良いところである。草間先生と一緒にカミキリを採った経験は、和歌山県のモクロベニカミキリや沖縄での採集など数回しかないが、草間先生は採集地では若手のカミキリ屋とまったく変わらなかった。若者と成果を競い、珍品を採れば有頂天になり、誰かに採られれば心底悔しがらる。大家と呼ばれる先生で、これほどストレートに感情をだされていた人を私は他に知らない。若者と同じというより、精神的には誰よりも若者だったのかもしれない。草間先生が書かれた昔の採集記などを読みかえしてみると、そんなことが随所に読みとれる。

草間先生の業績は、カミキリの新種をたくさん書かれたこと、日本鞘翅目学会を作られたこと、「日本産カミキリ大図鑑」を作られたことなど多々あるが、私は、「新しい昆虫採集、下」(1959)およびその増補新版(1965)、「新しい昆虫採集案内、III」(1973)の巻末に付されていた、「日本産カミキリの生態と分布一覧表」が最高の業績ではないかと考えている。この表には当時の日本産全種の詳しい解説があり、著者の独断と偏見で?、すべての種が「最も普通、普通、やや少ない、少ない、稀、非常に稀」の6段階にランク分けされていた。この一覧表は私たち当時の若手カミキリ屋には唯一のバイブルで、カミキリを採るとすぐこのランクを見て、一喜一憂するのが常だった。1960~1980年代の日本産カミキリ相解明の黄金期に、この6段階評価が与えた影響はすさまじいものがあり、カミキリ採集の大きな原動力となった。その集大成が「日本産カミキリ大

図鑑」だろう。私の“非常に稀”初体験は、15歳の時に都内上野公園で採ったテツイロヒメカミキリであった。これを採った時、「あゝ、やっと非常に稀を採った！」と、カミキリ屋として1人前になったような気分になったことを覚えている。

堅苦しい頭の人だったら、一覧表は作っても、この6段階評価は躊躇したであろう。いつも若者と同じ心でカミキリを見ていた草間先生だから、ここまでできたと思う。そして、それが全国のカミキリ屋にどれだけ夢と楽しみを与えてくれたかわからない。草間先生、楽しい夢をありがとうございました。(藤田 宏)

●草間慶一博士を偲んで

草間さんに初めて会ったのは昭和33年の秋頃だったと思う。僕が留学していたロス郊外のバサデナに近い研究所の生化学部門に草間さんが来られる事になり、彼の奥様が準備の都合上、ロスでの生活環境などを聞きに僕の留守宅に来られた。その際に二人の趣味がカミキリムシという点で偶々一致していた事が分かり、その旨僕の所に知らせがあった。

ロス郊外は砂漠に近い乾燥地なので、倒木などあっても芯まで乾燥しきって虫の気配など殆どなく、要領が分からないと甲虫の採集は容易ではなく一人で苦労していたので、彼の来るのが待ち遠しかった。彼が着いた翌日彼の部屋を訪ねると、ドアの近くに既に補虫網が立て掛けてあり、如何にも彼らしい出会いであった。

早速週末には近くの山まで一緒に採集に出掛け、夜は虫談義に楽しい時間を過ごし、時にはアリゾナまで遠征もした。ある晩僕の部屋で話をしていた彼が急に用事があるからと帰った。研究所の玄関には明るい照明がついていて、白壁に数は少ないが甲虫が飛来していたので彼の目的はここにあったのである。僕もそこに直行し運よく地面に落ちていた *parandra* を採集した。嬉しかった。

一足違いに来た草間さんにこれを見せたら、こんなのはカミキリではないと悔しがった顔が今でも楽しい思い出となっている。

彼はカリフォルニアでは大した成果をあげられなかったが、留学を一年延長して東部の研究所に移り、恵まれた環境のもとでカミキリの採集を満喫されている。僕は帰国後彼の勧めにより、当時五反田の喫茶店第二ノアールで行われていた京浜昆虫同好会の木曜サロンに参加するようになった。場所が移りメンバーも変わったがサロンは40年経た現在も上野で継続されており、僕にとっては楽しく充実した生活の糧となっている。そのきっかけを作ってくれた草間さんに心から感謝し、又兄に同行した奥日光や大井川上流の採集行などを懐かしく思い出しています。京浜昆虫同好会の設立当時から指導者として多くの後輩を導き育て、日本鞘翅学会の発展に寄与されて益々の指導が望まれていた時に病に侵された事、本当に残念に思います。ご冥福を祈ります。(衣笠恵士)

●痛惜・草間さん

標本箱の中に、太い、少し錆びた針に刺されたコトラカミキリの標本がある。この1頭は、私がカミキリにのめりこむきっかけになり、草間さんとのつながりを作ってくれた大切な標本である。私が通いつめた桜山の山すその農家の納屋の、壁ぎわに積まれた粗朶はカミキリの宝庫で、平山甲虫図譜を精読していた私は、飛んできた見たこともないカミキリが、「本州ニハ稀ナリ」と記されたコトラカミキリであることを直感した。小学校の作品展でラベルをみて驚愕された草間さんは、例の積極的で小さな虫屋にアプローチされ、なんかの間違いじゃないかと強い口調で言われたことをはっきり覚えている。この後は、小学校のそばの草間さんのお宅にいりびたっては、大きなケースに納められた標本箱を飽きもせず眺めることになった。中学に入った私は早速生物研究部に入学したが、とうに卒業されていた大先輩の草間さんも頻りに部屋においでになった。戦争の激化した1944年の僅か5日間の中学の夏休みを、草間さんと弟の昭二さんに連れられて奥日光で過ごした。金精峠でへたばってベソをかけた私を背負ってくれた草間さん、エメラルドグリーンの菅沼で下から見上げた大きなシシウドの花上の、クモのように脚が長くみえたキベリカタビロハナカミキリ、生まれて初めて見た生きているルリボシカミキリなど、忘れられない思い出である。工場動員に駆り出された終戦の夏を除いて、その後は日光、天城山、南アルプスと、私の標本箱には草間さんとの思い出がいっぱいつまっている。中でも1953年の最初の南アルプス行では、草間、露木、私の〈カミキリ3兄弟〉は、2週間の旅程で、特大のキスリングに体重ほどの荷物をつめこみ、日光での恩返しに3人用のテントは私が引き受けて、とんでもない苦行ではあったが恐ろしい数のカミキリでもあった。誰の食料を先に食べるかで多少のかけひきがあったくらいで、もめごともなく、遭難も数歩手前でふみとどまれたのは、ひとえに草間長兄の統率力と判断力によるものであった。背広のポケットをふくらませてアメリカ留学に旅立つ草間さんは、ちょっと昭和天皇に似ていた。アメリカでは2人一緒の時期はなかったが、迷っていた私にアリゾナ行きを決心させたのは、「マデラキャニオンは凄いぞ」という草間さんの一言であった。静岡大学に移られてからはあまり一緒にいる機会は無かったが、肉親同様、会わなくても心は通じていると信じていた。人生の師でもあった草間さんと、定年を迎えたこれからまたゆくりと語り合うことができると思っていた私の耳に、あまりにも悲しい、早すぎる訃報であった。

(小比賀正敬)

●草間さんのこと

草間さん。教えられた内容から言えば、先生と呼ぶべきだが、草間さん自身なんとなく、友達という姿勢で接していただき、こちらも同じ態度で接する

ことを望んでいたと思う。だから草間さんである。私の論文のミス指摘する時の申し訳なさそうな顔は、今も目に浮かぶ。つまり、上の立場で教えることが、あまり好きでなく、あくまで対等の友達が、友達のミスに気付いてちょっと注意するという態度をとってくれていた訳である。

教わったことは大変多いが、特に重要なことは、孫引きをしないで、オリジナルを必ず見ることである。図鑑類を鶴呑にし、それを前提に考えることしか知らなかった私には、文献を丹念に捜し出し、過去の研究者の書いた内容を一つ一つ検証してゆくことの大切さとおもしろさを熱っぽく説明する草間さんの話は、大変新鮮であった。おかげで、すこしずつ文献漁りのやりかたや、珍しい文献を持っている研究機関などを教わり、いつか本とコピーした文献で一杯の草間さんの本棚に、わたしの所も似てくることになった。

飄々としているようでなにかに興味をもつと子供のように目をかがやかせて話し込む草間さんの姿を見ることができないのは残念このうえないが、標本箱をみると草間さんの思い出と結びついたものも少なくない。北海道の知床の宿の廊下で偶然出合った時のこと、その翌日初めて採れたエトロフハナカミキリ、特に最後まで雌が採れずくやしがあった草間さんの思い出が詰まった標本を引っ張り出し、これまたゆかりのアルマニヤックの残りわずかの瓶をだして一杯飲むことにしよう。

…献杯…

(小宮次郎)

●草間先生の思い出

日本医学会総会というのがあり、明治以来4年毎に春に開催される。これは内科、外科などの臨床の他、解剖、生理学などあらゆる分野の医学会が同時に行われる。第15回(1959年)は東京で開かれ、全国から医師が集まった。医師虫屋も多く、緒方正美、馬場金太郎氏らも上京し、京浜昆虫同好会の人々と4月3日に東京学士会館でパーティーが開かれた。私はその席で始めて草間先生にお会いした。どんなお話をしたか記憶がないがハンサムな新進気鋭の学者の感じで、数カ月後には米国留学に出発された。その時の写真を見ると、冬の穂高で亡



1959年4月 草間先生(右端)

くなった熊谷幸明氏も他のテーブルには写っている。

さて、1973年に日本鞘翅目学会(現日本鞘翅学会)が誕生し、大会では毎年お目にかかった。講談社刊「日本産カミキリ大図鑑」(1984)の分布図作成の時には、静岡大学の教官宿舎へは数回お伺いし、データの打ち合わせを行った。そして奥様やお嬢様にもお目にかかり、打ち合わせ後にはビールを御馳走になった。たまたま旧制中学のクラスメートのS君も静大教授で、同じ宿舎棟に住んでいたので、一緒に歓談したこともあった。さらに、1986年から始まった好虫会ではよくお目にかかった。長い竿ネットを上を見て振るのは、かなり労力がかかる、でも斜面上がって元気に採集された。しかし1988・89年は御病気でお目にかかれなかった。1990年の木曾御岳での好虫会はもう重い長竿ネットはなく軽装備だった(月刊むし235号参照)。偶然この時はネットを持った遠山雅夫氏親子にお会いした。草間先生には1992年上高地でお目にかかったのが最後だった。御病気以後、体力の減退を語って下さったことが耳に残っている。この度御逝去の報に接し、とうとうの感がし御冥福を祈るのみ!

(穂積俊文)

●原型ムシヤー草間博士をしのぶ

東大の制服、カク帽(今時まったく存在しない)の白面紳士、草間大先輩が、時おり生物部の部室に現れた時、我々旧制神奈川県立湘南中学(現湘南高校)のムシヤーの卵どもは、あこがれと羨望の眼差しで、その英姿を見守ったものだ(1946年頃)。

だがあまりに偉すぎて、ソバへもよりつけなかった我々が、後年、何回か海外採集旅行へお供する榮に俗し、その「ムシヤー魂」ともいべき先生の採集に対するすさまじい執念のようなものを見せつけられ、ただただ敬服し、脱帽せざるを得なかったことを思い出す。

中国は雲南省、西双版纳(シーサンパンナ)へのあの「有名」な採集行の時、先生はまさに団長として我々を統括されておられた。道路事情が悪い雲南の奥地は、小型バスでの移動しかなかったが、いつどこで採集のためストップするかわからないのが常であった。私がドアが一番近い席に座ると、ボンと肩をたたかれ、「新堀君、悪いけどその席僕にゆずってよ」とおっしゃる。大先輩の命令なので「ハイ」と素直に席をかわったが、これはバスが停車して、いざ採集という時、誰よりも早く下車して、ムシのいそうな所へ飛んで行くための手段である。いつもこのような、「はやりにはやる」気持ちを持ち続けられるということは!(1982年)。

また、タイ北部チェンマイ郊外のドイ・ステップでの採集の時、先生はどうも調子が出なかった。ここでの採集経験豊かな後輩どもが、例えばグレネア属のホストの植物を教えなかったりする意地悪をしたこともあったせいで、さらにクリカシの花の咲

き頃のよいのにさっぱり当たらなかったせいもあって、「ちっともないじゃないか!」と怒りを爆発された。そこで、手ごろな1本のクリカシをお譲りしたところ、なんと1時間以上、その木から離れず、トラカミキリをはじめ、ユークラニスやメリオノエダをたたき続け、ついに花がなくなりかける寸前までいった。これ以上は自然破壊?になる、先生やめてください、ということもできない弟子ども、呆然と眺めていたのであった(1984年)。

これはマネすべきではないが、まさに「ムシヤ」の原型がそこにあった。(新堀豊彦)

●間に合わなかった論文

その日の夕刻、私は成田空港にいた。短い休暇を兼ねたこの1週間、数年来の懸案であったホノルル・ビショップ博物館の訪問を果たし、故グレスット博士の研究標本の調査を終えた私は、自分の研究に関わる幾つかの収穫を携え、多少とも凱旋帰国の気分がゲートを出たところであった。昨日の昼には、博物館の食堂で大味のチキンライスを食べながら、昆虫学部門のアル・サムエルソン博士から、彼が旧知の日本人研究者にまつわる近況を、あれこれと質問責めされたのである。やはりカミキリ好き同士であるから、人の話題も自然とそちらへ向く。「ドクター・クサマによろしく」というメッセージも受け取ったばかりであった。そうだ、帰国したら久しぶりに先生にお電話をして、今回の成果も含めて、よもや話でもしようかと思っていた。

まったく洒落にもならないが、虫の知らせというのだろうか。草間慶一先生の訃報は、空港に着いて電源を入れた携帯電話の録音で知った。電話は会社からの定例報告で、事務的な響きであった。そのせいか、にわかには信じ難かったが、何度も繰り返しくうちに、ようやく現実のものとして認識することができた。

もう18年も昔に遡るが、大学卒業直後に、草間先生のご指導を仰ぎながら私が書いた論文に、*Procleonme* 属というカミキリを扱ったものがある。

これはカミキリ亜科ホルカミキリ族の新属として、グレスット & ロンドン(1970)によってラオスから記録されたもので、そのホルカミキリ族への帰属理由は鞘翅が長くほぼ完全なことであった。しかし、形態観察を進めてゆくうちに、鞘翅の長さを除けば、この虫はむしろヒゲナガコバネカミキリ族のものではないかと、私は考えるようになった。

当時、そのような見解を草間先生にお話ししたことがあるが、根拠の甘さから、じゅうぶんにご理解いただけるまでには至らなかった。したがって、「鞘翅が長いコバネカミキリ」という私の仮説は、いまだ目の目を見ていないのである。

過去10数年来私はこの虫に惹かれ、東南アジア各地から多くの新種を記載してきた。そしていま、この属と近縁群をまとめようと思い、少しばかり大きな論文に取り組んでいるところである。今回のビ

ショップ博物館訪問はその研究の一環であった。

論文を完成させ、今度は自信を持って先生に自説を披露したいと考えていたのであるが、それはかなわぬことになってしまった。いまとなつては論文を書き上げても、ご仏前にご報告するしかない。しかし、せめてそうすることで、私をカミキリムシの一研究者に導いてくれた先生のご恩に報いたいと思う。(新里達也)

●採集をカミキリを愛した草間先生

思い返してみれば、草間先生のお名前を初めて拝見したのは、というより出会ったのは私と同世代の虫屋の多分少なからぬ方々と同様、北杜夫の「どくとるマンボウ昆虫記」の中であった。「…一つは上翅がすっかり黄色になっている例のクサマイという変種なんです。もう一つは亜種タヌキイライ。…」この一節を御記憶の方も多いことと思う。

その後、上野の甲虫屋サロンへ通いだして、あの「クサマイ」の主の先生にもお会いできるようになり、カミキリの同定や分類学のこと等、数えきれないほどご指導いただいたが、採集にご一緒させていただく機会は結局一度だけしかなかった。1982年5月の中国雲南省への2週間の採集ツアーである。このツアーでは期間中その伝統的?ともいふべき猛烈な採集スタイルにしばしば感服させられた。熱帯の暑さに日和りっぱなしの私やA氏ら若手を尻目に、常にフード付きジャッケを着込んでひたすらビーティングしていく後姿は「これが甲虫屋だ」と我々を叱咤しているようにさえ思えたものである。全体としては甲虫の成果は今一つ芳しくなかったこのツアーの終盤、私がモスグリーンに輝くフトカミキリ的一种 *Monochamus guerryi* を多数採集する機会に恵まれたことがあった。それまでツアー全体で2~3頭しか採れていなかったもので、帰宿後さっそく同行のカミキリ屋諸氏にお配りしたが、数頭を先生のところへもお持ちしたときの、こぼれんばかりの笑顔で喜んでくださったお顔は今でもハッキリと脳裏に焼き付いている。お礼を言ってくださりたいらしいのだが嬉しさのあまり言葉にならない様子で、本当に、心底カミキリがお好きなんだなあつくづく感じさせられたものである。

生化学者としての素晴らしい御実績もさることながら、しかし先生の“本性”は最後までカミキリが好きで好きでしょうがない生粋の虫屋であられたと思う。きっと天国でもあのジャッケ姿で、ひたすら採集に没頭しておられるのではないだろうか。いや、あるいは黄色の上翅の大きなハナカミキリの姿に変身して、花から花へ蜜ならぬ他のカミキリを愛でながら飛び回っておられるのかも知れない。

謹んでご冥福をお祈りいたします。(平山洋人)

●故草間慶一博士を偲んで

草間慶一博士の死去を知ったのは、亡くなられて数日経過した1998年10月11日の夜であった。長

期滞在中のインドネシア、東カリマンタン州の州都サマリダ市から斉藤秀生氏に電話をしたときに聞き、初めて知ったわけである。

故草間慶一博士(以後、草間先生)に私が初めて会ったのは、正確な日にちは思い出せないが1974年6月の石垣島バナナ岳の頂上であった。沖縄復帰後、虫屋が大量に南西諸島に入るようになっていた頃である。私が昼間、ガジュマルの木に登ったときにサキシマハブを見つけ、捕まえた拍子にバランスを崩し、3mばかり落ちたにもかかわらず、へびはしっかりとつかんで離さなかった日であった。なぜ、覚えているかと言うと、最初に会ったときにこの話しをしたからで、これで、私の事をえらく誤解され、後日、「日本で最も猛猛な虫屋」と紹介記事を書かれてしまったのである。しかし、この時には善い事もあった。草間先生が「器械体操をやっていたから手さえかかれば、大抵の所は登って虫取りができる」と、豪語したのである。その数日後の6月14日、バナナ岳の頂上の夜間採集で、無線中継所の建物から少し離れた倉庫の入り口の上の小さな出っ張りを見つけ、普段なら登る気さえ起こらないような所なのだが、私は先生に負けじと、それに飛びつき、よじ登った。そこで私は日本で二頭目のニホンムネヒダミヤマカミキリを捕まえる事ができたのである。

草間先生とはその後、何度となく会ったり、色々御教授うけたが、私の心の中には、なぜか、石垣島で会った短い時間だけが残っており、草間先生という、いつもその時のことが浮かんでくる。草間先生が静岡大学を退官されるに当たって、退官記念論文集「KUSAMAIA」に“南西諸島のカミキリムシ”と草間先生に献名した宮古島のミヤコリボンカミキリ *Glenea kusamai* の記載論文“A study on the Group of *Glenea chlorospila* in Japan”を書いたのも、最初に会った石垣島のことを思い出されたからである。

本当にお世話になりました。御冥福をお祈りいたします。

(楨原 寛)

●草間慶一先生との思い出

草間先生との思い出は数々ありますが、私がカミキリムシの同定もろくに出来なかった頃、当時、渋谷の久保商店で開かれていた京浜昆虫同好会の例会で、カミキリムシを同定していただいた頃のことが何よりも心に残っています。虫を見ていただきながら、次の採集の意欲につながるコメントをいただき、その度に心がときめきました。ほんの駆け出しであった私にも、親しみやすいスマイルで相手していただき、当時、甲虫をやっている人は皆恐そうに見えた私にとって、気軽に虫を見ていただける存在でした。

その後京浜昆虫同好会が「新しい昆虫採集」を発行し、先生はそのIII巻に日本産のカミキリムシのリストを掲載されました。これが日本のカミキリチームの口火になったことは、アマチュアの間で広く知られていますが、このリストこそ、私が当時は内容を暗唱できる位に愛用したバイブルでした。中でも「最も普通」とか「少ない」というように稀少度を6段階にクラス分けされたことは、アマチュアにとって、採集の目標を立てて、達成する楽しみを与えてくれました。私が米国に留学した際、先生の依頼で、ユアサヒゲナガヒメカミキリのホロタイプを調べ、クロキモンカミキリであると確認したところ、このリストに載せていただけたことは大変光栄に思っています。

最近、横浜市緑区、青葉区の甲虫を何でも採集していますが、やはり同定していただけるファミリーと、そうでないものでは熱の入りが自ずと違ってきます。ハネカクシなどは数年前までは、私にとって最も遠い存在でしたが、鞘翅学会の大会で同定していただけることが続いたので、今では見つければ必ず採る虫に昇格しました。

このように同定してもらえること及び地域的な稀少度の情報の二つがあれば、アマチュアは燃えるものであり、その二つをカミキリムシの世界で実践されたのが草間先生であったと思います。すなわち先生は、関東のカミキリ屋拡大の最大の功労者であり、私にとって最初の甲虫の先生であられたわけですから。(大木 裕)



梅ヶ島温泉(静岡県)第6回好虫会、右から5人目、草間先生。

●草間先生とネキの想い出

草間先生の突然の訃報をお聞きして大変驚き哀切の念を禁じ得ない。草間先生は関東のカミキリ屋の大御所であった。今日カミキリ屋を自認している方は何等かのかたちで先生の薫陶を受けていると思われるが、私もその一人である。そうしたご縁でここに草間先生との想い出の一端をしたためたいと思う。

1960年代は、カミキリ屋の間ではネキの話題が沸騰していた時代であった。ネキとは *Necydalis* 属(ホソコバネカミキリ属)のことであるが、カミキリムシの中でも上翅の短い特異な形態と珍種が多いことより当時のカミキリ屋にとって非常に人気があるものであった。

先生は世界の *Necydalis* 族の総説をお書きになっておられた。1966年、天城山のタンナサワフタギの材から私が見たこともないホソコバネカミキリが羽化した時には「ネキニューデタ」と静岡の先生に打電し、ご報告した。先生は早速東京に駆けつけて来られトガリバホソコバネカミキリであることを確認された。それは本州では愛鷹山の初記録以来数頭目の記録であった。

また、先生とは何度か採集にご一緒させていただいた。なかでも南アルプスの二軒小屋にご一緒させて戴いたことは、楽しい想い出である。

出かける前日は、静岡のお宅に泊めていただき、車での入山許可を得て、二軒小屋まで入った。第一日目は二軒小屋周辺を採集して回り、午後から東又沢の奥の広河原へ向けて出発した。自炊だったので大きなリックを背負い、採集をしながら進んだが、夜、真っ暗になっても、目的の小屋につかない。

それでも野宿するわけにも行かず、歩を進め午後8時をまわってやっと到着した。それからインスタントのカレーを暖めて食事をし、毛布にくるまって休んだが、大変寒かった事を記憶している。次の日は小屋の周辺を採集してまわり、また6時間ぐらい掛かって二軒小屋に戻った。その時、先生がカラフトホソコバネカミキリを貯木場の伐採木から採集した。1974年のことで、本邦ではその2年前の1972年に同南アルプス広河原で初めて採集されて以来2頭目の記録であった。毒ピンを眺めながら、二人で喜んだのを覚えている。いまでもその当時の少年の様な先生の笑顔が目には浮かんでくる。楽しい想い出とともにカミキリムシを教えてくださいました先生に、心から感謝している次第である。末筆ながら先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(中村俊彦)

●草間慶一先生を悼む

10月上旬のある日、月刊むし社の藤田 宏氏から連絡をいただき、草間先生がお亡くなりになったことを知った。日本のカミキリ界にとって大きな損失であることはもちろん、中でも京浜のカミキリグループにとっては「ボス」を失うことに等しい痛手と言える。

草間先生はご存知の通り生化学を生業とされ、虫はあくまでもアマチュアの立場であった。ろくに図鑑もなく、ヒナリハナがハムシかカミキリかでもめるような時代に、我々後輩アマチュア研究家の進むべき道筋を作って下さったといえる。虫の採集を心からエンジョイされ、おいくつになられても後輩のカミキリ屋をライバル視するような無邪気なところが、先生が誰からも慕われた大きな要因だったろうと思う。私は残念ながら採集にご一緒させていただいたことがないのだが、人から伺うこうしたお話を感ぜさせないアマチュアリズムの真骨頂は、私も負けないでいつまでも真似をし続けたいと考えている。

草間先生の偉大な功績のひとつに内田老鶴園社のカミキリ目録3部作がある。京浜のカミキリ仲間と思い立て1959年に刊行した初版が基礎となり、1965年の増補改訂版を経て1973年の最終版に至る労作で、特に当初の2作は先生の意図するところがタイトル(生態と採集法一覧表)にも表われていて微笑しい。草間先生にとっては、あくまでも珍種を採る為の教本のつもりで書かれたものだったのだろう。よく言われる「珍品度6段階評価」も、我々アマチュアカミキリ屋の大きな励みになったことは言うまでもない。

今回私如きが草間先生の追悼号に寄稿させていただけるのは、恐らくは1988年刊行の記念論文集「KUSAMAIA」の座談会メンバーであったからだと思う。あの時はどちらかといえば事務局の立場での参加であったが、今ではご一緒させていただけてとてもよかったと思っている。人の採った欲しい虫を半ば強引に交換してもらったこと、珍品大量採集狙いで散るまでしつこく花を掬いまくったこと、選曆にして採集意欲が全く衰えていないこと、いずれ劣らず草間先生のお人柄がにじみ出ていて実に楽しい座談会であったと思う。虫はあくまでも趣味の世界に留め、アマチュア研究家に徹しきられた草間先生の目が最後まで少年の目をされていたのがとても印象的であった。

社会的地位から引退することはあっても、虫屋に引退はない。我々アマチュア虫屋がそうでありたいと思う姿そのままに、最後まで虫屋人生を謳歌された草間先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(小笠原 隆)

●駄々こね

1980年の夏(だったと思う)、京都で国際昆虫学会が開かれた折、グレスット夫妻を囲んで20名弱の虫屋(主にカミキリ屋)で会食をしたことがあった。この時の寄せ書きは「月刊むし」に載っているので、調べれば出席者がわかるはずだが、調べるのがめんどろなので記憶だけをたよりに書くと、林匡夫、草間慶一の大御所2人と大林延夫、横原寛、窪木幹夫、水野弘造、常喜 豊といったカミキリ狂の面々。黒沢、佐々治、森本といったカミキリ以外の大先生たちも参加されていたような気がする。

る。岩田隆太郎君と私が草間さんに言いつけられて会計係のようなことをして、私が林さんに林さんとは知らずに(初めて会ったのだ)早く金を払えと催促し、このナマイキな若造は何者だといった顔をされたのを覚えている。浮世の序列などには何の関心もなさそうな草間さんは、タメ口を聞く私や、超タメ口を聞く岩田君にも終始ニコニコかつ飄々として、話がどこでどころんだのかは覚えてないが、気がつくと3人で春日山に虫採りに行くことになっていた。

そこで私は、草間さんの無邪気ともいえるほどのカミキリ好きをいやという程知らされることになった。真夏の春日山にはろくなカミキリはいなかったが、草間さんは私や岩田君よりも沢山カミキリを採らないと気がすまないらしく、私たちの毒ビンの

ぞいては、ちょっとムツとした顔をされて懸命にたたき網などをされている。「もう帰りましょう先生」という私たちに、あろうことか先生は、さっきの花のある所まで戻りたいとおっしゃる。春日山の奥山の道は狭く、私は一方通行の道をバックで10分も車を走らされるハメとなった。

長身のやさしい目をしたグレンシットはすでに亡く、私のタメ口をたしなめてくれた林さんも、自分の子供程の年齢の若造にカミキリ採り競争で負けて駄々をこねた草間さんも、さらには私や岩田君などとはケタ違いのタメ口男の秋山黄洋君も次々と亡くなって、1998年の秋も終わってしまった。かなうことならば今一度、草間さんの駄々をこねた顔を見てみたい。

(池田清彦)

○ルイスクビナガハムシの秋季における知見

ルイスクビナガハムシ(*Lilioceris lewisi* JACOBY)は、鞘翅目ハムシ科クビソノハムシ亜科に属する体長6.0~6.9 mmの小昆虫であり、初夏にマイヅルソウ、ナルコユリで成虫が見られ、また幼虫もそれらのユリ科植物を食草とすることが知られている。しかし、秋季以後初夏までの生態は知られておらず、土中で羽化後、そのまま林内リター中で春を迎えるものと考えられていた。

筆者は、秋季の針葉樹幼木枝のピーティングで、多くの個体を採集したので報告する。

20頭、山梨県鳴沢村天神峠附近(精進口登山道)、5.IX.1998; 10頭、同地点、10.IX.1998; 10頭、同地点、19.IX.1998; 3頭、同地点、13.X.1998、筆者採集保管。

採集地附近は、富士山の北西斜面、海拔1,360 mに位置し、ブナ、ミズナラ、シラビソ、ウラジロモミを主とした亜高山性の混成樹林が形成されている。登山道両脇にクマザサが生い茂るが、林内は下草が少なく、林床にはミヤマイボタ等の小灌木あるいは構成樹の幼木が5 m四方に1~3本ほど見られるのみである。

本種は、林縁部及び広葉樹小灌木からは得られず、林内のシラビソ、ウラジロモミからのみ得られ



た。なかでも特に多くの個体(1枝当たり1~5個体)が得られたのは、樹高1~2 mの幼木の枝(写真1)からであった。

さらに詳細に観察したところ、地表より高さ50 cmほどの水平にはり出た枝の葉上で、触角を交互に振っている個体が見られた(写真2)が、交尾など他個体と接触しているものは見られなかった。



なお、同地点と南東に500 mほど離れた大田和林道と富士林道との交叉部附近(海拔約1,500 m)で、同時期に樹高2~3 mのモミの胸高枝より各日1個体づつを採集している。

また、13.X.1998には天神峠附近のウドの枯葉内より1個体を採集している。

越冬に入る前に何らかの理由でモミ類の幼木に集まり、その後リター等に分散して越冬するものと推察される。現在マーキング調査及び採集個体の消化管内容物の分析中である。

末筆ながら、多くの御教授を戴いた松崎春雄氏、刈部治紀氏に深謝いたします。

参考文献

木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑(IV), 保育社。

木元新作・滝口春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説, 東海大学出版会。

(東京都八王子市, 大塩一郎)

○オオクリロアシプトコメツキの幼虫

Anchastus castaneus Miwa, 1934 オオクリロアシプトコメツキの成虫の形態や生態の概要は大平(1996)が報告したように、現在では奄美大島、沖縄本島、石垣島などに分布することが判明している。

本属の幼虫は円筒形状の針金虫型で、第9腹節が細長い円錐状をしているので近属の種との識別は容易にできる。日本産種では *A. aquilus aquilus* CANDÈZE, 1873 クリロアシプトコメツキが大平(1962)により明らかにされているが、本種の一般外形もこれに類似しており、図示したように第9腹節は円錐状である。脱皮殻のため各部の詳しい形態は調査できなかったが、体は黄褐色で光沢を有し、第9腹節の末端への細まりはクリロに比してより弱く、末端の尖りもより短い。また、腹節背板上の点刻はより粗雑で密に印する。



オオクリロアシプトコメツキの第9腹節背面

この個体は、筆者の一人である深石が、石垣島仲筋のシイの根元の土中より1998年4月16日に見いだして飼育したところ、4月18日には蛹化し、5月4日に成虫が出現した。本属の幼虫は一般に朽ち木中に見いだされているので、本来の生息場所はシイの朽ち木中ではないかと思われる。

引用文献

- 大平仁夫, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究: 1-179, 61 pls.
 ——— 1996. 日本産アシプトコメツキ類について. 越佐昆虫同好会々報, (76): 1-14.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫;
 沖縄県石垣市, 深石隆司)

○有明海の汽水域で採集されたハマベゴミムシ

ハマベゴミムシ *Pogonus japonicus* PUTZEYS は、森田誠司氏らにより山口県から多産地が報告されたが一般には少ない種のように、九州からの記録はない。筆者は佐賀県中部を流れる有明海にそそぐ六角川の河原で本種を採集しているので報告する。

佐賀県における有明海沿岸は広く干拓された上に干満差が大きく、海岸はもとより流入する河川の下



流域の川岸はほとんどがコンクリートやブロックなどで固められている。六角川は珍しく下流部まで土の土手で、内側には芦原が広がっている。本種は芦原の湿った泥に乗った石やごみなどの下から見出すことができたが、本来の好適な環境ではないのか個体数は少ない。

種々ご教授いただいた森田誠司氏に深く感謝したい。

2頭, 佐賀県杵島郡江北町六角川河原, 13. VIII. 1997; 1頭, 同地, 29. IX. 1997.

参考文献

- MORITA, S. & K. TERADA, 1998. Notes on the Bembidiinae (Carabidae) of Japan X. The genus *Pogonus*. *Jpn. J. syst. Ent.*, 4(1): 33-38.

(佐賀県嬉野町, 西田光康)

○「コクロオバボタルの採集例」の訂正

本誌第121号に掲載された「コクロオバボタルの採集例」に対し、横須賀市自然博物館の川島逸郎氏より再検の依頼があったため、筆者が標本を再検したところ誤同定であることが判明したので訂正する。報告した種は *Lucidina okadai* NAKANE et OH-BAYASHI コクロオバボタルではなく、*Pyropyga* 属の一種(仮称ノハラボタル)と思われる。本種は新大陸からの帰化種で、種名については川島氏が調査中である。ちなみにコクロオバボタルとは、前胸背板に赤い紋があり、体全体がほぼつや消し状であることから区別できる。

末筆ながら、筆者の報告について現地調査を行なった上で誤同定の可能性をご指摘下さった横須賀市自然博物館の川島逸郎氏と研究員の方々に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 大場信義・高井 泰・後藤好正・川島逸郎, 1996. コクロオバボタル雄成虫の外部形態・習性および生活環境. 横須賀市博研報(自然), (44): 33-45.

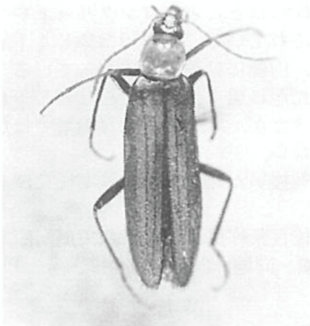
後藤好正・川島逸郎, 1998. 東京都多摩川河川敷で記録された帰化ボタル. 全国ホタル研究会誌, (31): 27-28.

(東京都足立区, 木元達之助)

○ヤエヤマホソジョウカイモドキ沖縄本島に産す

ヤエヤマホソジョウカイモドキ *Idgia flavicollis* REDTENBACHER は佐藤(1985, 1989)によれば、香港、台湾、日本では西表島の方に産する比較的少ない種類である。最近になって奥島(1994)は石垣島からの記録を報告したが、八重山諸島以外の産地は未だに知られていないようである。筆者らは琉球大学農学部昆虫学研究所蔵のカミキリモドキ科標本を整理していたところ、沖縄本島産の本種標本を見出したので、ここに新産地として報告しておく。

2♂♂, 沖縄本島国頭村与那, 11-VII-1972, 照屋匡採集, 琉球大学農学部昆虫学研究所保管。



本種はジョウカイモドキ科の中では特異的に細長い体型をしており、頭部も前方に伸びて花粉食に適応した形態をしている。奥島(1994)も報告しているように、本種は色彩・体型ともに類似しているキムネカミキリモドキ *Oedemera testaceithorax* KÖNO と花上で同時に採集されることが多い。キムネカミキリモドキは台湾から八重山諸島、沖縄本島、さらに奄美諸島にかけて分布しているので、今回この2種の分布域がほぼ重なっていることが判明した。両者が擬態関係にあるかどうかは断言できないが、非常に興味深い現象である。なお、台湾および西表島産の個体と外部形態の比較を試みたが、目立った差異は見出されなかった。

末筆ながら、今回の発表にあたり何かと便宜を計って下さった琉球大学農学部の佐々木健志先生と屋富祖昌子先生、新報出版の村山望氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

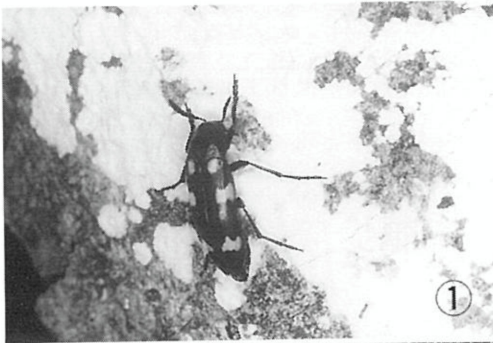
- 奥島雄一, 1994. 石垣島のヤエヤマホソジョウカイモドキの記録. 甲虫ニュース, (105): 7.
 佐藤正孝, 1985. ジョウカイモドキ科. 原色日本甲虫図鑑(III), pp. 162-167. 保育社.
 佐藤正孝, 1989. ジョウカイモドキ科. 日本産昆虫総目録I, pp. 365-366. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共編.

(北海道大学農学部, 溝田浩二;
 琉球大学農学部, 東清二)

○富士山麓青木ヶ原で採集した甲虫類

富士山麓青木ヶ原は、多様な樹木で構成された大原生林で、この中を通る精進口登山道(山梨県鳴沢村大室山付近)は、東京近郊における恰好の研究フィールドであったが、現在は特別保護地域に指定されて容易に採集を行なうことができなくなった。そこで、指定以前に採集していた甲虫類について記録しておく。

- 1) *Cladiscus obeliscus* LEWIS ホソカッコウムシ
 1頭, 28. VII. 1993, 筆者採集.
 ブラックライトを用いたライトトラップに飛来した。
- 2) *Spinzoa coerulea* LEWIS ルリホソカッコウムシ
 1頭, 2. VII. 1994, 筆者採集.
 林内の空き地に横たわっていたイヌブナの倒木に飛来した。
- 3) *Dendrophagus longicornis* REITTER ヒゲナガヒメヒラタムシ
 1頭, 6. VI. 1995, 筆者採集.
- 4) *Triplax devia* LEWIS フタホシチビオオキノコ
 多数, 2. VII. 1994, 筆者採集.
 イヌブナの倒木に生じたアラゲカワキタケと思われるキノコに集まっていた。
- 5) *Tritoma osawai* NAKANE オオサワチビオオキノコ
 1頭, 19. IX. 1993, 筆者採集.
 イヌブナの倒木に生じたウズラタケと思われるキノコを後食していた。
- 6) *Tritoma towadensis* CHÛJÛ ムツホシチビオオキノコ
 1頭, 30. VII. 1994, 筆者採集.
- 7) *Endomychus hiranoi* SASAJI ヒラノクロテントウダマシ
 多数, 4. IX. 1996, 渡辺英行採集.
 広葉樹の立枯に多い。分布は局地的だが、発生地での個体数は多いようである。
- 8) *Pseudopyrochroa atripennis* (LEWIS) ムネアカクロアカハネムシ
 3頭, 21. VII. 1994, 筆者採集.
 林内の空き地に横たわっていたイヌブナの倒木に飛来した。
- 9) *Orchesia* sp. サビイロニセハナノミ(仮名)
 8頭, 21. VII. 1994, 筆者採集.
 菌の生じた細い立枯から採集した。小型で体色が淡い黄褐色であることから、同属の優先種カバイロニセハナノミ *O. ocularis* LEWIS と区別できる。9月になると本種は見られず、カバイロニセハナノミが多くなる。
- 10) *Dircaemomorpha validicornis* (LEWIS) ムツモンナガクチキ(写真I)
 多数, 18. VII. 1994, 筆者採集.
 道沿いの細い立枯に生じた白い膏葉状の菌に多い。体長にかなり差があり、他地産のものに比べて小型の個体ばかりであった。



11) *Dircaea erotyloides* LEWIS フタオビホソナガクチキ

5頭, 22. VIII. 1993, 筆者採集.

ブラックライトを用いたライトトラップに飛来した.

12) *Phloeotrya trisignata* NOMURA コモンホソナガクチキ (写真2)

1頭, 28. VIII. 1993, 筆者採集.

夜間, イヌブナの倒木上を徘徊していた.

13) *Neostereopalpus niponicus* (LEWIS) ケナガクビボソムシ

2頭, 21. VII. 1994, 筆者採集.

末筆ながら, 貴重な標本を恵与下さった渡辺英行氏にお礼申し上げます.

(東京都足立区, 木元達之助)

○ツヤケシオニミツギリゾウムシの採集例

ツヤケシオニミツギリゾウムシ *Paramorphocephalus fumosus* (MORIMOTO, 1976) は *Leptamorphocephalus* 属の1種として記載され, 後に *Paramorphocephalus* 属に移された (MORIMOTO, 1982). 模式産地は奄美大島で同時に屋久島からも記録されたが, それ以降記録のない稀な種である.

筆者は採集者の松本慶一氏のご好意により屋久島産の本種の標本を検査する機会に恵まれたので, 追加記録として報告する.

1♂1♀, 鹿児島県屋久島小楊子林道, 30~31. VII. 1998, 松本慶一採集.

スダジイの衰弱木の樹皮下より得たとのことである.

貴重な標本を恵与下さった東京農大の松本慶一氏にお礼申し上げます.

参考文献

MORIMOTO, K., 1976. On the Japanese species of the family Brentidae. *Kontyû*, 44: 267-282.

森本 桂, 1979. 日本産ミツギリゾウムシ科概説 (1), (2). 甲虫ニュース, (46): 1-6; (47): 1-5.

MORIMOTO, K., 1982. On some Japanese Brentidae (Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, 37: 31-36, pl. 1.

(東京農大, 吉武 啓)

○*Myrina* という属について

私はさきに (本誌第123号: 6-7, 1998), カブトムシの属名について論じたが, これに関連してボルネオ, マラヤ, スラウェシなどに分布する *Allomyrina pfeifferi* (REDTENBACHER) (いわゆるサビカブトムシ) の学名についてもふれた. すなわち上記の種が記載されたさい設立された *Myrina* は下位異物同名であるという理由で ARROW (1911) は *Myrina* REDTENBACHER, 1867 を破棄し, 新たに *Allomyrina* という属名を提唱した.

ところが REDTENBACHER の属に先行した *Myrina* という属については, 一体どのような動物 (群) なのか, いつ, だれによって設立された属なのか, これらについて ARROW はまったくふれていない. この点について長く気になっていたが, 最近になって, これが *Myrina* FABRICIUS, 1807 (type-species: *Papilio alcidas* CRAMER, 1776) であることがわかった.

この属はアラビア半島南部から主としてアフリカに分布するミドリシジミ亜科 Theclinae, Amblypodini 族に属するシジミチョウで, HEMMING (1967) によると現在単系統群の4種が知られている. いずれも翅表中央部は青藍色, 裏面は褐色, 後翅後縁はやや突出し尾状突起がある. また, LARSEN (1997) によると, 幼虫の食餌植物はすべてクワ科のイチジク属 *Ficus* で, ちなみに英名は Fig tree blues であるという.

引用文献

ARROW, G., 1911. Notes on the coleopterous subfamily Dynastinae with description of new genera and species. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (8) 8: 153.

FABRICIUS, J., 1807. *Illiger's Mag. Insektenkunde*, 6: 286.

HEMMING, F., 1967. The generic name of butterflies and their typespecies. *Bull. Brit. Mus (Nat. Hist.) Ent. sup.* 9: 509.

LARSEN, T., 1997. *The butterflies of Kenya, and their natural history*, Oxford: 178-179.

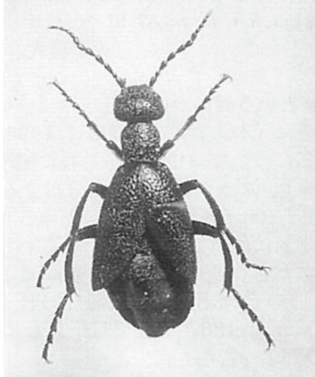
REDTENBACHER, M., 1867. *Reise Novara, Zool.*, 2, col.: 78.

(東京都多摩市, 三宅義一)

○オオツチハンミョウ四国に産す

オオツチハンミョウ *Meloe proscarabaeus sappo-rensensis* KONO は、従来は北海道と本州のみに分布すると考えられていた(平嶋, 1989)。筆者は徳島県下で採集された本種の標本を検したので記録しておくたい。

1♀, 徳島県麻植郡山川町高越牧場, 11. V. 1997, 真野友香里採集, 筆者保管(真野俊作経由)。



牛が放牧された牧草で、草本の葉を活発に摂食していたという。真野俊作氏の話によれば、同牧場においてこの個体以前にも2頭採集したことがあるという。

末筆ながら、貴重な標本を恵与された真野俊作・友香里両氏に心からお礼申しあげる。

参考文献

- 平嶋義宏監修, 1989. 日本産昆虫総目録。
河野広道, 1936. 日本動物分類. 大花蚤科・地膽科. 三省堂, 東京。
黒澤良彦ほか編, 1985. 原色日本甲虫図鑑. III. 保育社, 東京。

(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

○北陸で採集されたカミキリムシ3種の記録

1. アメイロカミキリ *Stenodryas clavigera clavigera* BATES

1♂1♀, 石川県門前町猿山岬, 7. VI. 1998, 江崎功二郎採集。

石川県からは初記録である。クリの花のスイーピングによって得られた。今回採集された場所は未調査地であった。

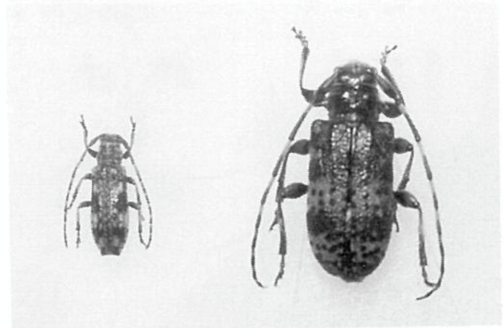
2. シロオビドイカミキリ *Mimectatina fuscoplagiata* (BREUNING)

1♀, 富山県大山町折立, 24. VIII. 1997, 江崎功二郎採集。

富山県からは初記録で西限に近い記録と思われる。新鮮なオオトラカミキリの加害枝(アオモリトドマツ)を歩行していた。

3. エゾトゲムネカミキリ *Oplosia suvorovi* PIC

1♂2♀, 石川県尾口村ハライ谷, 17. VII. 1996, 八神徳彦採集。



左: シロオビドイカミキリ(富山県産), 右: エゾトゲムネカミキリ(石川県産)

石川県からは初記録である。これ以前に記録があるとされているが、標本が確認できない等の理由で石川県カミキリ目録からは削除されてきた。シナノキの折れ枝のピーティングによって得られた。

参考文献

- 長谷川道明他, 1993. カスリチビカミキリについての分類学的知見. 豊橋市自然史博研報, (3): 21-26。
井村正行, 1998. 石川県の昆虫. カミキリ目録: 197-217. 石川県自然保護課, 石川県。
(石川県林業試験場, 江崎功二郎・八神徳彦)

○ヘリハネムシ類の採集記録

邦産ヘリハネムシ類3種の採集例を報告する。

1) *Ischalia (Pseudohomalisis) patagiata* LEWIS ヘリハネムシ

1頭, 宮崎県日南市富士, 9. VIII. 1991, 遠藤千秋採集; 3頭, 群馬県上野村野栗沢, 25. VII. 1996, 進藤健朗採集。

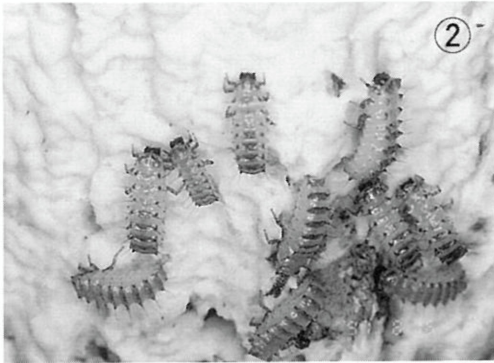
野栗沢では、林道脇に落ちていた枝にとまっていた。

2) *Ischalia (Pseudohomalisis) luteolineata* PIC キズジヘリハネムシ

1頭, 長野県安曇村島々谷二股, 21. VII. 1936, 黒佐和義採集; 約20頭, 山梨県須玉町里宮平, 16. VIII. 1997, 筆者採集。

里宮平では、林内の古い朽木に生じた白い膏葉状の菌に集まっていた。成虫(写真1)が朽木の上部





で、幼虫らしきもの(写真2)が下部で、それぞれ集まっており、いずれも朽木上で盛んに菌を食っていた。また、成虫は交尾も行ってた。

3) *Ischalia (Pseudohomalisis) takane* M. SAITÔ タカネヘリハネムシ

1頭, 長野県安曇村焼岳, 4. IX. 1996, 遠藤千秋採集; 1頭, 山梨県須玉町八丁平, 2. VIII. 1997, 亀澤洋採集

八丁平では、林内の草の上で盛んに触角を動かしていた。

末筆ながら、貴重な標本を恵与下さった遠藤千秋, 亀澤洋, 黒佐和義, 進藤健朗の各氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

SAITÔ, M., 1994. A revisional study of the Japanese species of the family Ischaliidae (Coleoptera, Heteromera). *Elytra, Tokyo*, 22: 335-343.

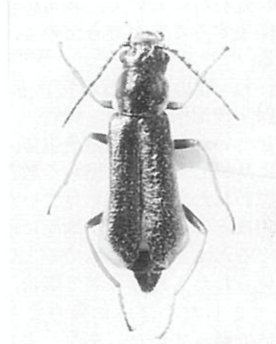
(東京都足立区, 木元達之助)

○*Haplomalachius ishiharai* の採集例

Haplomalachius ishiharai M. SAITÔ et WITTMER は埼玉県北本市石戸宿, 戸田市道満, 大宮市, 東京都大田区大井埠頭で得られた個体を基に1989年に記載されたジョウカイモドキである。また、浦和市秋ヶ瀬から *Malachius vitticollis* KIESENWETTER? として報告されている種 (NAKANE, 1985) も本種のような種である。いずれにせよ、極めて採集例の少ない種であるが、筆者は埼玉県東松山市において本種を採集しているので報告する。

1♀, 埼玉県東松山市毛塚(九十九川脇の湿地), 5. IV. 1998. 筆者採集, 保管(図)。

カササゲの生える湿った土の上を歩いているところを採集した。原記載によれば、本種は草地的環境で得られているようであるが、戸田市や北本市の産地にはいずれも東松山市と同じような湿地環境が存在していた事から、本種の生息環境はこうした湿地周辺の草地であると思われる。なお、残念なことにこの湿地は最近埋め立てられ、同地での採集は不可能となった。同じように、上記で既知産地として挙げた場所のほとんどが開発されてしまっており、本種の採集は今後ますます困難となるであろう。



末筆ながら本種を同定して頂いた名古屋女子大学の佐藤正孝博士, 採集に同行, 本種についての情報を御教示頂いた東京農業大学大学院の岸本年郎氏, 埼玉県嵐山町の豊田浩二氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

SAITÔ, M. and W. WITTMER, 1989. Some notes on Japanese Melyridae (Coleoptera). *Elytra, Tokyo*, 17: 57-60.

NAKANE, T., 1985. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, XXXVIII. *Fragm. Coleopt.*, (38/40): 153-164.

(東京農大, 新井志保)

○宮城県初記録のクロツヤハマベゾウムシ

クロツヤハマベゾウムシ *Thalasselephas major* は, EGOROV & KOROTYAEV (1977) によって記載された海浜性のゾウムシである。現在までに国内では北海道と岩手県からの記録が知られているが、宮城県における採集例はないようである。筆者は同県北部で本種を採集しているので報告する。

1頭, 宮城県牡鹿町狐岬付近, 13. III. 1995, 吉武啓採集。

採集地は堆積した貝殻でできた小規模な浜で、海藻類やその他の種々雑多な漂流物が打ち上げられていた。その中の発泡スチロールのゴミの下より得たものである。

当日採集に同行して下さった吉武洋子氏にお礼申し上げます。

参考文献

EGOROV, A. B. & B. A. KOROTYAEV, 1977. Review of the weevil tribe Emphyastini (Coleoptera, Curculionidae), habitants on supralittoral of the Japan, Ochotian and Behring seas. Useful insects and pests of the far east: 43-53 (in Russian).

森本 桂, 1993. 海辺の甲虫類概説。昆虫と自然, 28(11): 2-6.

(東京農大, 吉武 啓)

○ウスチャコガネの生態的知見

Phyllopertha diversa WATERHOUSE ウスチャコガネは本州, 四国, 九州に分布し, やや開けた環境にて春季に出現するコガネムシである。

筆者は群馬県鬼石町において、非常に多くの本種を目撃および採集することができたので、状況等も含めて報告する。

40♂♂10♀♀, 群馬県鬼石町桜山公園, 9. V. 1998, 新井志保・豊田浩二採集, 保管。

本種が発生していたのは公園の芝生で、足の踏み場もないほどに乱舞しており、恐らく数百頭は発生しているかと思われた。しばらく見ていたところ、日が陰った瞬間ほとんどの個体が地面に潜ってしまい、日が出てくるとまた乱舞し始めるといった状況が繰り返され見られた。地面に潜る際は、芝生の根際にあるちょっとしたくぼみに降り立ち、前脚を使って凄い勢いで潜っていた。また、よく見ると幾つかの小集団が飛び交いながら芝生の上を移動しているようで、芝生全体にまんべんなく見られるといったものではなかった。発生状況から考えて、幼虫は芝などの根を害害している可能性が高い。

末筆ながら、採集に同行して頂いた東京農業大学昆虫学研究室の新井志保嬢に厚くお礼申し上げる。

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

○ヨツボシツヤナガゴミシの山梨県からの記録

ヨツボシツヤナガゴミシ *Abacetus tanakai* は、全国的にも記録の少ない種類であるが、これまで未記録であったと思われる山梨県で採集しているので報告する。報告にあたり、本種の記録についてご教示頂いた笠原須磨生氏に感謝する。

1頭, 山梨県富沢町万沢, 6. VII. 1997, 菊部治紀採集。

道ぞいにあるライトのカバー上で、たまっていた甲虫の死体の山の中から発見されたもので、恐らく富士川に生息地があるのだろう。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 菊部治紀)

○メダカハネカクシ亜属2種の記録

日本産メダカハネカクシ亜属の覚え書き(直海, 1998)によれば *Stenus* 属 *Stenus* 亜属は日本から21種が知られ、9群に分けられている。5番目の群に *S. juno* PAYKALL と *S. indagator* EPPELSHEIM があり、何れも北海道と本州(中部以北)に産するが稀な種である。特に本州での記録は少ないとのことなので、ここに報告する。

1. *Stenus (Stenus) juno* PAYKALL

1♂2♀♀, 長野県北安曇郡小谷村, 4. VI. 1994, 筆者採集。



本種の♂は腹部第7節腹板に四角い凹みがある。

2. *Stenus (Stenus) indagator* EPPELSHEIM

1♂, 神奈川県西丹沢明神峠, 12. VIII. 1993, 筆者採集。

本種の♂は腹部3~6節腹板に顕著な剛毛束があってわかりやすい。直海俊一郎博士は王者の風格を備えた種と表現している。(写真)

末筆ではあるが、同定並びにご教示いただいた直海俊一郎博士に厚く御礼申し上げる。

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○日光山塊におけるニセマルハナノミの記録

ニセマルハナノミ科のニセマルハナノミ *Declinia versicolor* SAKAI et SATO は、1996年に記載されたニセマルハナノミ上科の特異な甲虫である。分布域として四国、本州中部が知られているが、筆者も日光山塊から採集しているので記録しておく。現時点で、もっとも東の採集例にあたる。

1頭, 群馬県片品村笠塚山(1,600 m in alt.), 27. VI. 1998, 亀澤 洋採集, 酒井雅博保管。

湿っぽい谷部で、下草の葉上に静止していたものを得た。付近をかなり注意してみたものの、追加個体は得られなかった。

末筆ながら、本種を同定され、発表をすすめていただいた酒井雅博博士に深謝したい。

参考文献

SAKAI, M. and M. SATO, 1996. The coleopteran family Decliniidae (Elateriformia, Scirtoidea) new to Japan, with description of its representative. *Elytra*, Tokyo, 24: 103-111.

木元達之助, 1997. 奥秩父八丁平における甲虫類の採集記録. 月刊むし, (317): 36.

(埼玉県庄和町, 亀澤 洋)

日本鞘翅学会

会費(一カ年)6,000円, 次号は1999年3月下旬

発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社